

Title	グローバルCOE・言語学コロキウム共催ワークショップ : Language and cognitive processes : neurophysiological, developmental, and crosslinguistic perspectives
Sub Title	
Author	今井, むつみ(Imai, Mutsumi)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2007
Jtitle	活動報告書 Vol.1, (2007.) ,p.29- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章 : シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20080300-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

開催日	2008年2月26日
企画班	言語と認知
企画者	今井むつみ
講演者	Guillaume Thierry (University of Wales, School of Psychology), Sotaro Kita (University of Birmingham, School of Psychology)

認知・言語班では、2月26日に三田キャンパス東館4階セミナー室でイギリスのバーミンガム大学の喜多壮太郎さん、ウェールズ大学のGuillaume Thierryさんのお二方を講師にお迎えしてワークショップを行った。喜多さんの講演は“Spontaneous speech-accompanying gesture as a window into 'thinking-for-speaking': Insights from cross-linguistic and developmental studies”というタイトルで、発話にともなうジェスチャーと発話がどのような関係にあるかを検討するため、英語、トルコ語、日本語話者がモノの空間移動の動きについてスピーチを生成してもらい、そこで発話に伴うジェスチャーと発話の関係を分析した研究が紹介された。移動の動作を言語表現する際、英語は“roll down the hill”のように一つの動詞句の中に様態と動きの軌跡を同時に盛り込むのに対し、日本語、トルコ語では「転がりながら落ちる」のように様態と動きが二つの句にまたがって表現される傾向にある。その際のジェスチャーは発話の形式と一致し、英語話者は様態のジェスチャーと軌跡のジェスチャーを同時に盛り込むのに対し、日本語やトルコ語の話者は様態と軌跡を別々に表現する傾向が強い。しかし、それは話者の母語に固定的な傾向ではなく、英語話者でも発話が様態と移動を別の句に分けて表現するような状況では、ジェスチャーも日本語話者、トルコ語話者のように二つの要素を系列的に行うというデータが示され、ジェスチャーが言語表現のシンクロした心的表象の鏡のような機能を果たすという興味深い知見が発表された。Thierryさんの講演では“Unconscious lexical semantic access in bilinguals”という題で、中国語を母語と

し、英語を第二言語とするバイリンガル話者の無意識の言語処理において、母語である中国語が無意識にアクセスされることをERPを用いて鮮やかに示した研究が紹介された。この実験では中英のバイリンガル被験者に英語の単語ペアを提示し、二つの単語が意味的に関連しているかどうかを判断してもらった。その際、意味的には無関係の単語ペアで、母語の中国語で形態素（漢字）が共有されている場合と形態素の共有がないペアを比べると、行動的には二つの条件の間に反応時間やエラー率にまったく差が見られなかったが、ERPではより強いN400の反応が得られた。つまり行動には表出されない非常に微妙な、無意識のレキシカルプロセスをERPが検出できることを示した研究で、その実験手法の鮮やかさと論理の緻密さに魅了された。

年度末の忙しい時期であるにもかかわらず、東館セミナー室が満員で椅子がたりなくなるほどの盛会で、2時間半の講演時間が終了した後も予定時間を過ぎても多く聴衆が会場に残り、活発な意見を講演者と交わっていた。

(今井むつみ)

